

多元文化論講座

- (1) 講義名：多元比較表象論 a
- (2) 副題：印刷術の誕生と文化革命
- (3) 担当教員：鈴木繁夫
- (4) 開講時限：金曜 2 限
- (5) 教室：文総 623
- (6) 目的・ねらい：

「未来はバックミラーのなかにある」(マーシャル・マクルーハン) という言葉がある。どのような事象も歴史的に把握しないと、事象の外貌にとらわれ事象の実態を見誤り、事象を自分で的確に意味づけることを忘れ、不適切な対処することになってしまう。

前期 (A) は、メディア革命という視点から、16-17 世紀の印刷術 (紙を媒体とした活版印刷) の興隆によって生じた文化革命について考察し、21 世紀の Web2.0 状況を再考する。

後期 (B) においては、メディア革命によって生じた世界観の変化のうち、自然の中に散逸している「驚異」的な物事に人間の「好奇心」が触発されて、人間の視野が広がる一方で、自国宗教文化規範の優越性を再認するといったよじれた方向に展開したことを学ぶ。

- (7) 履修条件等：

前期授業 A と後期授業 B を続けて履修することが望ましい。

- (8) 講義内容：

〔概要〕

インターネットは、今の多くの私たちにとっては、公的には場所と時間の制約からできるだけ自由になって共同作業を行っていくための道具であり、私的には好縁を育成し強固なものにしていくための手段という理解されている。こうした意思疎通メディアへの考え方は、21 世紀に特異なものではなく、西洋では 16-17 世紀にすでに確立していた。この考え方の確立は、千数百年続いた筆耕と羊皮紙を介して修道院・大学図書館をインフラとする、顔が見える対面情報伝達文化に取って代わった。

こうした歴史的視野に立つと、現に私たちが経験し実際に抱いているメディア観、それに付随する文化のあり方も異なって見えてくる。そしてその次に待ちかまえているのは、では自分はどう考えるかにかかってくる。なぜなら現実の心情としては、発信者のわからない情報の波に呑まれているよりも中世的な小さなまとまりの空間のなかで互いに気心が知れている (と思い込んでいるか、そう思い込みたい) 共同性に賛成だが、それに積極的に賛成することには、当為必然が含意されていないからだ。

授業では、エリザベス・アイゼンステイン『印刷革命』(原題 *The Printing Press as an Agent of Change*) に沿って議論を展開しながら、こうした図式が成り立っている歴史的

背景をさぐっていきます。

なおアイゼンシュタインは、歴史を記述する際には、いつも暗黙の内に現代の人間観が肯定されており、「価値中立的な語法」（ロラン・バルト）による「いま・ここ・私」に向かって進む歴史として要領よくまとめている。フーコーの「人間の終焉」や「知の考古学」という視点はまったくくない。その意味でとてもおとなしい歴史叙述書になっているので、批判的に読むことが要求される。

〔授業方法および計画〕

授業は講義とはいっても、ともに対話しながら考えていく形式で授業を進めていく。また講義の約3回ごとに内容理解を試す小テストを行う。課題へのレポート提出を最低二度行う。

講義の内容は以下の順にそっていく。

1. 未確認の「文化革命」とその特徴
2. 印刷術から捉えたルネッサンスの二段階
3. 聖書釈義を変える印刷術と宗教改革
4. 印刷術を介する<自然という書物>と<知識共同体>
5. コペルニクス革命の背後にある印刷術
6. 印刷術が変えた聖書と自然

(7) 成績評価の方法：

評成績の評価は以下の基準にしたがって行う。授業出席（30%）、授業参加（35%）、小テスト・課題レポート（35%）。

(10) 教科書：

・Elizabeth L. Eisenstein. *The Printing Press as an Agent of Change: Communications and Cultural Transformations in Early-Modern Europe Volumes I and II*. Cambridge University Press, 1982.

・エリザベス・アイゼンシュタイン『印刷革命』（小川昭子 [ほか] 共訳、みすず書房、1987年）[原著の抄訳]

(11) 参考書：

・ジャン＝ジル・モンフロワ『消えた印刷職人：活字文化の揺籃期を生き抜いた男の生涯』宮下志朗訳、晶文社、1995年

・香内三郎『活字文化の誕生』晶文社、1982年

・W. J. オング『声の文化と文字の文化』桜井直文、林正寛、糟谷啓介訳、藤原書店、1991年

(12) 注意事項：

1)教科書・参考書は自分で購入すること。

2)この講義のさらに細かい内容は以下のサイトにアクセスすること（2011年4月10日以降）。<http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/~ssuzuki/ClassLecture/GraduateLecture.htm>

3)聴講は自由ですが、聴講生もかならず小テストを受け、課題レポートを提出して下さい。

4) オフィスアワーはとくに設けず、面談・質問はメール (ssuzuki アト nagoya-u.jp アトは@に置き換え) で随時受ける。

(1) 講義名：異文化接触論演習 a

(2) 副題：諸文化共生の光と闇

(3) 担当教員：田所光男

(4) 開講時間：月曜 3 限

(5) 教室：文総 623

(6) 目的・ねらい：

諸文化の比較研究の領域において修士論文・博士論文を執筆するために必要な知識を増やし、技法を高める。また口頭発表のやり方を訓練する。

(7) 履修条件等：なし

(8) 講義内容：

1. 論文批評

〈いい論文〉、〈よくない論文〉、とはどういうものかを考えてみたい。絶対にやってはいけないこと、最低限やるべきこと、こうするとよくなること、などを、実際の例にあたっていろいろ検討したい。具体的には、皆さんにとって当面の目標となる『多元文化』や『Autres』に掲載されている論文を、各自が批評する。

2. 諸文化共生の問題の検討

現在、日本でも、中央省庁や地方自治体、ヴォランティア団体、また、大学などの研究・教育機関など、様々な領域で、「多文化共生」ということが盛んに語られている。しかし、この用語それ自体があいまいであり、「多文化」という直訳語はもちろんであるが、「共生」という言葉もどこかいかかわしい。もともと生物学の用語が人間社会に転用されているわけで、愛想はいいが、本当のところよくわからない。

差異をもった複数の集団の共生は、アラブ人とユダヤ人の場合に限られず、実現するのがきわめて難しい理想であろう。モロッコのイスラム教徒アブデルケビール・ハティビはこの種の共生の困難の一般性をこう指摘している。「いかなる国も、たとえその国に複数の言語や思考法が存在しないとしても、複数の存在、文化のモザイクです。しかし、このような複数性はこれまで一度として（もろもろの集団、民族、男女、権力のあいだの）対等な関係として構成されたことはなく、つねに支配被支配の不均衡な関係によって統御されてきました。[中略] 国を形作る異なる複数の要素の間にはつねに潜在的な軋轢が存在します。」〈仲良くやろう〉とか、〈みんな一緒〉というような言葉で示される共同性が隠すもの、抑圧するものがあり、美しく立派な共生を喧伝する公式の言葉に対し徹底的に懐疑的になる必要があることは確かであろう。

しかしこの問題はきわめて微妙である。一切の共生言説を警戒しようと説くこのハティビも、モロッコにおけるユダヤ人マイノリティの境遇を検討する場合には、自分の所属するムスリム・マジョリティの「正義」や「保護」を肯定的に述べている。それは、モロッコ出身のユダヤ人ヴィクトル・マルカが、フランス保護領時代のモロッコ社会を、

植民者フランス人、次いでアラブ人、そしてはるか下にユダヤ人、と三階層で描き出し、独立後のモロッコにおいても、ジンミー言説は公然と生きていたと断言することときわめて対照的である。共生言説を批判する人もまた、自己の所属や自己の差異の問題を通る時、他者を排除しないためには共生言説を必要としてしまうのであろうか。

全体としては次のようなプログラムを予定している。

- 1) 文化的差異に対する態度の三つのモデル
 - a 差別主義、明暗のコントラスト
 - b 同化主義、一面の銀世界
 - c 差異主義、多色刷り
 - 2) 多文化共生への志向
 - a 同化主義で多文化共生は可能か
 - b 近代市民社会の公私の二分界
 - c 統合主義（リベラル多文化主義）における多文化の位置
 - d 多文化主義の目指すもの
 - e 文化相対主義の危うさ
 - 3) 総務省研究会の「多文化共生」
 - a かつての「協和」的同化との違いは？
 - b 視野の中心からはずされた人々結び：差異からの自由
- (9) 成績評価の方法：

以下の3点から総合的に評価する。1) 『多元文化』や『Autres』に掲載されている論文、研究報告などの一作について口頭で批評を行なう。2) 授業中に挙げる論文あるいは著作について、口頭発表する。3) 学期末に筆記試験ないし口頭試験を受ける。

(10) 教科書：

必要な文献は、授業の中で適宜指示する。

(11) 参考書：

必要な文献は、授業の中で適宜指示する。

(12) 注意事項：なし

(1) 講義名：文化記号論 a

(2) 副題：記号論入門

(3) 担当教員：古田香織

(4) 開講時限：火曜3限

(5) 教室：文総 522

(6) 目的・ねらい：

記号論について、講義と文献読解（授業中に指示）により、その基本的理論、概念、方法論について学び、それらを実際の分析へ応用することによって、文化現象を多角的

に捉えることのできる視野を養う。すなわち、記号論が、言語・文化の具体的な事象にどのように応用されているのかについて色々な分析例に触れ、様々な理論の個々の研究への応用力を養う。学生諸君のそれぞれの研究テーマが記号論とは直接関係がないとしても、この授業を通して、柔軟な思考力・応用力・分析力を身につけてもらいたい。

(7) 履修条件等：

- 1) 受講にあたり、池上嘉彦著 『記号論への招待』岩波新書を読んでおくこと。
- 2) 後期開講の「文化記号論 b」を併せて受講することが望ましい。

(8) 講義内容：

〔概要〕

まず、講義を通して、記号論の全体像をつかんでもらう。すなわち、基本的な用語や考え方、主な記号論研究者についての知識を身につけてもらう。その上で、記号論という学問をさらに理解するために、記号論的な考え方やアプローチを用いた、あるいは応用していると思われる論文を発表形式で読みながら、さらに記号論についての見識を深めていく。

〔授業方法および計画〕

第1回目：教科書や参考書、授業についての細かい指示（発表の順番等）を行うので、受講予定者は必ず出席すること。

第2回目：記号論についての講義を行う。おもに、池上嘉彦著 『記号論への招待』の中で取り上げられている様々な記号論の概念について説明する。第一回目に指示した箇所について必ず予習をしてくること。

第3回目：引き続き記号論についての講義を行う。第2回目に指示した箇所について必ず予習をしてくること。

第4回目以降：この回以降は、発表形式による文献読解を行う。受講者は各自記号論に関する論文を読書報告する。他の受講者もあらかじめ読んでおき、報告の後で、質疑応答、ディスカッションを行う。

(9) 成績評価の方法：

評価は、課題（読書報告・レポート）および出席点による。受講者に担当してもらう口頭発表を40%、授業最終時に提出してもらったレポートを40%。さらに、授業中の態度、積極的な発言や討論への参加度を20%程度として加味し、総合的に評価する。

(10) 教科書：

特に指定はせず、適宜プリントを配付する。

(11) 参考書等：

- ・池上嘉彦『記号論への招待』岩波新書（必読文献）
- ・ウィリアムスン著、山崎／三神訳『広告の記号論Ⅰ、Ⅱ』柘植書房
- ・石田英敬『記号の知／メディアの知』東京大学出版会

その他、授業中に指示する。

(12) 注意事項：

受講を検討しており、初回の授業に参加できない場合は、前もって個別に相談に来るこ

と。

(1) 講義名：中南米言語表現論演習 a (2010 年度から多元文化論講座で開講)

(2) 副題：スペイン語・ポルトガル語言語文化圏対照研究 a

(3) 担当教員：水戸博之

(4) 開講時限：前期木曜 4 限 (受講者と相談の上、変更あり)

(5) 教室：文総 609

(6) 目的・ねらい：

(中南米言語表現論演習 a では、スペイン語圏を中心に扱う予定であるが受講者の諸条件を考慮し柔軟に内容を検討する。)

スペイン語とポルトガル語、両言語を広い視野から総合的に対照し知識と理解を深めるための演習である。すなわち本演習において、これら 2 言語自体に対し様々な領域や場において接触する可能性のある受講者が、研究を進めるための方法論に言語学的基礎付けする機会を見出すことを目的としている。なぜならば、東海・中部圏はこれら 2 言語に対する社会的需要が高く、問題に対処するためには、単なる会話能力のみならず、高度な言語学的素養も求められているからである。

本演習では、2 言語への習熟が単位認定の基本的要件となる。しかしながら、近親言語であっても両言語を等しく、いわゆるバイリンガルに扱うのは実際には極めて困難であるので、まずイベリア半島起源の言語に関わる知見を広げてみようといった好奇心を第一に課題に取り組んで欲しい。

(7) 履修条件等：

少なくともスペイン語またはポルトガル語いずれかの基礎的運用力。

いずれか一方を主専攻言語、他を副専攻言語と本演習では呼称する。スペイン語またはポルトガル語話者の留学生諸君の受講も歓迎する。留学生諸君は単なるインフォーマントとしての演習への参加のみならず、日本語および近親言語との比較対照により、母語について新たな発見とより深い認識が得られるであろう。

(8) 講義内容：

〔概要〕

演習であることから、様々な目的や条件を持った受講者に対応するため、開講時点では特に定めない。また、シラバス編集上、スペイン語圏とポルトガル圏とに分けて記載するが、両言語圏を並行して扱うことも可能である。

〔授業方法および計画〕(スペイン語圏関係を中心に)

以下に、過去数年間の主要な内容を示すので参考にしてほしい。

2010 年度：「解放の神学」の先駆的实践者の一人、アルゼンチン人神父カルロス・ムヒカの伝記(スペイン語)の始めの部分を講読。第二次世界大戦前後からペロン復権までのカトリック教会と社会に関する考察を行った。

2009 年度：演習 a は、スペイン語とポルトガル語と二つのグループに分けて実施した。

スペイン語圏専攻者のためのグループは、各週ほぼ1作の割合で、スペイン語圏各国を代表する劇映画を視聴し、各地域の言語文化的特性を分析した。

ポルトガル語のグループは、ポルトガル語を専攻語学とする受講者とブラジル人留学生を対象に、日本語とポルトガル語の双方向のコミュニケーションを目標に、日本の新聞に現われたブラジル人コミュニティに関する記事の講読、ブラジルで制作された映画のポルトガル語字幕の活字おこしを通じた聴解練習とコミュニケーション分析などを行った。

2008 年度：文献の精読：ペルー農村部の教育問題、北部メキシコの農村の社会的変動

2007 年度：文献の精読：ペルーの国民文化形成、メキシコ社会の変容等。留学生を交えた討論等。 2006 年度：南米移民についての資料研究、発表、スペイン語文献の精読。留学生を交えた討論等。

2005 年度：スペイン語史・語学に関するスペイン語文献の講読と発表、討論。

複数年度にわたり適宜対象としてきた演習内容：日本国内制作のスペイン語・ポルトガル語メディア。日本国内のスペイン語話者、ポルトガル語話者の言語社会的状況。

(9) 成績評価の方法：

スペイン語とポルトガル語2言語への習熟を前提に、次の3要素を中心に総合的に判断する。

- 1) 各自のテーマについての発表（学会・研究会等の発表も含む）。40%
- 2) 講読文献（スペイン語・ポルトガル語両言語）の精読による発表。40%
- 3) 副専攻言語（スペイン語またはポルトガル語）による作文演習（ネイティブチェックを受けること）。20%

(10) 教科書および(11) 参考書等：

最近使用した主要なものを掲載する。（スペイン語関係）

Martín de Biase, *Entre los fuegos Vida y asesinato del Padre Mugica*, Buenos Aires, 2009.

Jose Maria Arguedas, *Formación de una cultura nacional indoamericana*, México, 1998.

Milton M. Azevedo, *Introducción a la lingüística española* 2 ed., Pearson Education (New Jersey), 2005.

María Asunción Merino Hernando, *Historia de los inmigrantes peruanos en España*, Madrid, 2002.

E. Garduño; E. García; P. Morán, *Mixtecos en Baja California el caso de San Quintín*, Ciudad de México, 1989.

Eliana Ramírez Arce de Sánchez Moreno, *Estudio sobre la educación para la población rural en Perú* (Proyecto-FOA-UNESCO), s. f..

視聴した劇映画：「ラベリント・デ・パン」「ベンガ」「エビータの真実」「100人の子どもたちが列車を待っている」「地下の民」「大きな翼を持った老人」「ローマの奇跡」「予告された殺人の記録」「わが心のマリア」「鳥の歌」

(12) 注意事項：

スペイン語とポルトガル語を扱うことを大前提としている演習である。演習 a と b を履修することが望ましい。演習 b からの履修も可。

先端文化論文化講座

(1) 講義名：先端文化思想論 a

(2) 副題：性の解放と資本主義の精神

(3) 担当教員：越智和弘

(4) 開講時限：火曜 3 時限

(5) 教室：文総 609

(6) 目的・ねらい

われわれの生きる世界は、どこへ向かっているのだろうか？ぬるま湯のごとき繁栄に浸りつつも、じつは緩慢な自己崩壊へ突き進んでいるのだろうか？人間は、資本主義社会の中で、どのように作り変えられていくのだろうか？授業においては、こうした素朴な疑問を念頭に、性差や人種の壁を越えた平等言説のもと、すべての人間を均質な労働力として動員するために西欧で起きた変革に着目する。問題となるのは、資本主義を支えてきた精神、すなわちスピリットの面にみられる連続性と、歴史的節目に起きた変革との関係である。

連続性は、われわれが依然として、16 世紀以降に西欧で生まれた近代と呼ばれる諸価値を規範にすえる世界に生きていることに由来する。変革は、資本主義を柱とする近代的連続性の中で、資本がまるで独自に意図したかのごとく、人びとに意識変革を促し、それによって労働力の大量動員が急激に加速した時期を指している。過去 500 年ほどの変革期はいくつか挙げられるが、授業においては、とりわけ 20 世紀後半期に起きたセクシュアリティをめぐる意識変革に焦点を当て、それが資本主義のグローバル化にとりいかに不可欠であったかを明らかにする。

(7) 履修条件等

前期授業 A と後期授業 B を続けて履修することが望ましい。

(8) 講義内容

〔概要〕

性的快楽を敵視し、その元凶を女性に押しつける禁欲のシステムを構築したことにこそ、資本主義が世界を覆い尽くすまでの力をもちえた真の原因が見出せることは、いまだ十分に理解されているとはいいがたい。ただ、こうした原因を理解しえたいうえでも、厳格な禁欲を旨とする西欧が、どうして今日では性と女性にたいしもっとも解放的な文化であるかに映るのか、という疑問は残る。この逆説に答えるべく、授業では、1960 年代後半期に起きた性の解放運動に焦点を当て、それがどのようにして起きたのかを概説する中から、解放だと思われたものが、じつはセクシュアリティのセックスへの還元

をとおし、性差を超えて資本主義に奉仕する均質化された労働力を生み出す過程であった可能性を浮き彫りにする。

〔授業方法および計画〕

20 世紀後半期の学生運動やフェミニズムを支えた性を解放する意志と、性を邪悪視する西欧の倫理観との関係をめぐる講義と、関連する思想家の基本文献を受講者に担当発表してもらい議論する授業とを交互に行う。講義および発表の回数等は、受講者の人数に応じ適宜調整する。内容は越智著『女性を消去する文化』に大筋に沿ったものとなる。講読用に使用するテキストは、南部生協で製本販売する。

第 1 回目：講義方針の説明、担当者の割り当て

第 2 回目：「世界の文化地図と女性アート」

第 3 回目：「理解不能となった性解放の必然性」

第 4 回目：テキスト講読

第 5 回目：テキスト講読

第 6 回目：テキスト講読

第 7 回目：「性の解放を誘引した三要素」

第 8 回目：「性の解放を誘引した精神的要因（1）」

第 9 回目：「性の解放を誘引した精神的要因（2）」

第 10 回目：テキスト講読

第 11 回目：テキスト講読

第 12 回目：テキスト講読

第 13 回目：「性の思想化（1）」

第 14 回目：「性の思想化（2）」

第 15 回目：「性解放の功罪：新たな還元主義」

(9) 成績評価の方法

評価は、受講者に担当してもらった口頭発表を 40%、授業最終時に提出してもらったレポートを 40%。さらに、授業中の態度、積極的な発言や討論への参加度を 20%程度として加味し、総合的に評価する。

(10) 教科書、参考書等

- ・越智和弘『女性を消去する文化』（鳥影社）
- ・講読用プリント製本

(11) 注意事項

特になし。

(1) 講義名：前衛芸術概論 a

(2) 副題：音楽と資本主義（1）

(3) 担当教員：藤井たぎる

(4) 開講時限：火曜 5 時限

(5) 教室：文総 609

(6) 目的・ねらい：

近現代音楽の構造と資本主義社会のメカニズムとが、いかに相互に関連しあっているかを具体的に検証し、「近現代音楽史」を読み解くための“技法”を身につける。

(7) 履修条件等：

とくになし。

(8) 講義内容：

〔概要〕

音楽様式は思想や政治形態ばかりでなく、経済機構とも密接に関わっていると言っ
てよい。たとえば音楽の生産者が、市場価値を生むために音楽制作に勤しむのは当然のこ
とだろうし、『のだめカンタービレ』ブームやヴィジュアル系演奏家の増産などに見ら
れるクラシック音楽のサブカルチャー化も、そうした活動の末端現象であることは指摘
するまでもないだろう。しかしここで考えてみたいのは、そうした誰の目にも明らかな
現実ではなくて、調的和声音楽や、市場経済とはまったく無縁な、あるいはむしろそれ
に対して明らかに警戒心と嫌悪感すら示していたシェーンベルクやその末裔の“現代音
楽”が、凶らずも資本主義的構造を表象してしまっているという“歴史的事実”なのであ
る。音楽の生産（作曲・演奏）および消費（受容）のみならず、近代以降の音楽の構造
やシステム自体が徹頭徹尾、資本主義的であるという仮説を検証する。

〔授業方法および計画〕

毎回、受講者にはあらかじめ読んでおくべきテキスト・参考文献などが指定される。
それを授業での議論のたたき台とし、以下の各項目についてそれぞれ3～4回（ただし
プロローグは1回）の講義時間をあてる予定である。

*プロローグ：音楽と非音楽の境界

*美と「わたし」という存在についての判断：ケインズとラカン

*音楽における価値形態論：調的和声から12音技法へ

*シェーンベルクのマトリクスとシュトックハウゼンの9.11：20世紀音楽史のため
に

*愛と死のオペラ史（1）：オルフェオとエウリディーチェの愛と死

(9) 成績評価の方法：

出席（40%）、授業への積極的貢献（30%）、発表（30%）。期末レポートは課さない
が、毎回、指定されたテキスト・参考文献をあらかじめ読んで、議論に積極的に参加で
きるように準備をしたうえで、出席すること。また授業に関連するテーマで、受講者
には少なくとも一回は口頭発表をしてもらう。

(10) 教科書、参考書等：

授業中に指定する。

(11) 注意事項：

事情によって欠席する場合は、できるかぎり担当教員にメールであらかじめ報告す
ること。

- (1) 講義名：現代民主主義特論 a
- (2) 副題：ラディカルな民主主義とその理論的・哲学的諸前提
- (3) 担当教員：布施哲
- (4) 開講時限：火曜 6 時限
- (5) 教室：文総 623
- (6) 目的・ねらい：

国内外の政治的、社会的動向を、人文社会科学の知識を下地に考察するとともに、逆に前者に照らし合わせながら後者に対して必要な理論的修正を加え得るだけの知性を磨く。

- (7) 履修条件等：

日本語の非常に高度な運用能力はむろんのこと、英文で書かれた専門書や評論を読み込むだけの英語力、さらには必要に応じて最小限のフランス語文献読解能力も必須となる。また、政治学や哲学の基本的概念を、わからなければその都度、自ら調べて理解しようとする積極性のない学生はこの講義にはまったく向かない。さらに、「教科書・参考書等」欄に記載の文献は、本講義内容を理解するにあたって最低限必要なものであるため、遅くとも学期中にはすべて一通り目を通しておくことが強く望まれる。

- (8) 講義内容：

〔概要〕

ここ数百年のうちに人類が築いてきた物質文明の限界が露呈してきた現代においては、政治、社会、経済、国家、市民、民族、アイデンティティ等々について語るうえで、私たちが普段は自明視している様々なものの考え方それ自体に対する原理的な分析・説明が、ますます必要になってきている。そうした問題意識ならびに状況を背景とする本授業は、したがって、必然的に哲学的な議論の比重が高くなるが、それは現実離れした誇大妄想や内省的な「自分探し」の類とは真逆の、アクチュアリティに富んだ、しなやかでありながらも強靱な知性を涵養するためのものである。

〔授業方法および計画〕

前期・後期とも、数回の講義を経て学生諸氏の基本的な理解度やパフォーマンスを見極めたいうえで、読解を進めてゆく主たるテキストをあらためて指定する。テキスト指定後は、学生による発表内容を叩き台としつつ、テキスト当該個所の主要なサブテーマを明確化すると同時に、それが今日的な問題といかに関わり、あるいはいかに関わらないかについての議論を進めてゆく。

- (9) 成績評価の方法：

出席：30%、授業への積極的貢献：40%、発表：30% (ただし、学生によって学期末にレポートを課す場合がある。)

- (10) 教科書、参考書等：

【哲学・精神分析】

- ・ カント 『純粹理性批判』、『実践理性批判』
- ・ ヘーゲル 『精神現象学』、『小論理学』

- ・ ハイデガー『形而上学入門』
- ・フロイト『精神分析(学)入門』、『夢判断』、『快樂原則の彼岸』

【政治学・政治思想】

- ・ ホッブス『リヴァイアサン』
- ・ マキアヴェッリ『君主論』、『リウイウス論』
- ・ マルクス『経済学批判』、『ドイツ・イデオロギー』
- ・ シュミット『政治的なものの概念』、『政治神学』
- ・ バーリン『自由論』
- ・ ロールズ『正義論』
- ・ ラクラウ＝ムフ『ポスト・マルクス主義と政治』
- ・ 藤田省三『天皇制国家の支配原理』、『維新の精神』
- ・ 京極純一『日本の政治』
- ・ 布施哲『希望の政治学ーテロルか偽善か』

(11) 注意事項：

特になし。

(1) 講義名：現代先端文化分析演習 a

(2) 副題：ベンヤミンの身体論—複製技術と複製された身体

(3) 担当教員：山口庸子

(4) 開講時限：月曜 4 時限

(5) 教室：文総 609

(6) 目的・ねらい：

複製技術論で知られるベンヤミンは、直接的に身体を論じてはいないが、その著作には、パッサージュのマネキン、肖像写真、映画における俳優の身体など、複製された身体のイメージが数多く見出せる。ベンヤミンの複製技術論・メディア論を、身体という観点から読み直し、19世紀後半から20世紀という現代社会の出発点において、複製された身体がどのようにとらえられていたのかを考察する。

(7) 履修条件等：

特に指定しないが、身体文化や身体史、モダニズムの芸術等に何らかの関心があることが望ましい。ベンヤミンの著作は邦訳を用いるが、参考文献には、英訳文献も用いる予定なので、最低限、英語文献を読む用意があること。ドイツ語原文を読む語学力があれば、なお良い。また、日本語文献ということで安心せず、毎回十分に予習をしてくること。

(8) 講義内容：

〔概要〕

導入部を経て、まずベンヤミンの『複製技術時代の芸術作品』をもとに、大量複製技術が登場した時代の身体のあり方を考察する。次に、写真、映画、ラジオなど、メディアによる違いを考慮しつつ、複製された身体がどのように論じられているかを検討する。

〔授業方法および計画〕

取り上げる予定のベンヤミンの著作（全部、もしくは抜粋）は以下の通り。『複製技術時代の芸術作品』『写真小史』『パリ書簡<II>—絵画と写真』『生産者としての作家』『ボードレールにおけるいくつかのモチーフについて』『パリ・19世紀の首都』『パッサージュ論』『オスカル・A・H・シュミッツへの応答』『演劇とラジオ放送』『叙事演劇とは何か』『シュルレアリスム』『夢のキッチン』『生産者としての作家』。ただし、参加者の関心や前提となる知識を考慮して内容を変更することがある。授業予定表・文献表は、最初の授業時に配布する。

(9) 成績評価の方法：

出席：40%、課題の達成：30%、授業への積極的貢献：30%

(10) 教科書、参考書等：

最初の授業時に指示する。

(11) 注意事項：

オフィス・アワーは必要に応じて随時。メールで予約すること。また、やむを得ぬ理由により欠席するときは、届け出ること。

アメリカ言語文化講座

(1) 講義名：現代アメリカ文化論 a

(2) 副題：大恐慌時代のアメリカ文学・文化 1

(3) 担当教員：長畑明利

(4) 開講時限：月曜 6 時限

(5) 教室：文総 609

(6) 目的・ねらい：

大恐慌時代のアメリカ文学・文化に関する知見を高める。文学・文化テキストの分析方法を学ぶとともに、高度な英文読解力を身につける。

(7) 履修条件等：

基礎的な英語読解力を有すること、学習に対する意欲、積極性を有することを履修の条件とする。後期同時限に開講される「源代アメリカ文化論 b」と連続して受講することが望ましい。

(8) 講義内容：

現代アメリカ文化論 a」（前期）と「現代アメリカ文化論 b」（後期）を通じて、大恐慌時代（主として 1930 年代）のアメリカ文学・文化について学ぶ。a（前期）では、Morris Dickstein, *Dancing in the Dark: A Cultural History of the Great Depression* をテキストとし、大恐慌時代の種々の文化的・社会的事象について学ぶ。時間が許せば、そこで紹介されている代表的な作品についてもレポートしてもらおう。学期末に本書の書評を提出してもらい、これを期末レポートとする。また、大恐慌をテーマにした映画、大恐慌

時代の音楽について短いレポートを課す。授業計画については、授業 HP を参照のこと。

(9) 成績評価の方法：基礎的な英語力を有することを単位取得の条件とする。そのうえで、授業点（及び小レポート）50%、期末レポート 50%。欠席 3 回で単位放棄とみなす。

(10) 教科書：Morris Dickstein, *Dancing in the Dark: A Cultural History of the Great Depression* (Norton, 2010) [ISBN: 978-0393338768]

(11) 参考書：

・授業 HP もしくは ML にて紹介する。

(12) 注意事項：授業関連の連絡は、授業 HP および ML を用いて行う。授業 HP は次の通り。<http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/~nagahata/lectures11/amcul11a/amcul11a.html>。

(1) 講義名：言語文化情報論 a

(2) 副題：なし

(3) 担当教員：尾関修治

(4) 開講時限：火曜 2 時限

(5) 教室：北棟 309

(6) 目的・ねらい：

英語教育をはじめとした教育現場でコンピューターとネットワーク(ICT)をいかに教育支援に活用するかを学ぶ。単に利用のテクニックや開発手法だけでなく、ICT の活用が教育にどのような意味を持つのかについても議論する。「e ラーニング技術演習 a」では特に学習者相互のコミュニケーション活動の支援を中心に学ぶ。

(7) 履修条件等：

コンピューターとインターネット利用に関して一般的な技能が必要。

(8) 講義内容：

〔概要〕

英語教育はいくつかの特徴から ICT の利用が活発な領域である：学習者の年齢等の幅が広い；シラバスが確立されている；音声教材が必須である；その他。英語教育での e ラーニング開発と活用を学ぶことで他の領域での教育支援にも応用可能な技術と知見を得ることができる。

「e ラーニング技術演習 a」では以下の内容をそれぞれ 1 回ないし数回の授業で取り上げ演習する：

・ ICT 利用教育とは何か。ICT 利用教育に求められるもの。

・ 学習支援サイトの設置と運用

・ ネットワークを活用したコミュニケーション教育の事例：e メールの利用；web 掲示板等を利用したコミュニケーション；ブログやフォーラムによるライティング学習；チャット、MOO、Skype などによる同時的コミュニケーション

・ コミュニケーション教育に必要な資源と支援手法

予定されるレポート課題の例：ネットワーク上のコミュニケーションを利用した外国

語学習授業の立案

〔授業方法および計画〕

第1回：ICT利用教育とは何か。英語教育に求められるもの。

第2回：ネットワークを活用した英語教育の事例1

第3回：ネットワークを活用した英語教育の事例2

第4回：ネットワークを活用した英語教育の事例3

第5回：ネットワークを活用した英語教育の事例4

第6回：ICT利用英語教育に必要な資源1

第7回：ICT利用英語教育に必要な資源2

第8回：ICT利用英語教育に必要な資源3

第9回：学習支援サイトの設置と運用1

第10回：学習支援サイトの設置と運用2

第11回：学習支援サイトの設置と運用3

第12回：学習支援サイトの設置と運用4

第13回：課題発表1

第14回：課題発表2

第15回：講評とまとめ

予定されるレポート課題の例：ネットワーク上のコミュニケーションを利用した英語授業の立案

(9) 成績評価の方法：

開発や議論を重ねることで自分のアイデアをどのように発展させていったかというプロセスを重視して評価する。したがって、講義期間を通して授業サイト上の Wiki 等に記述したメモや課題が直接的な評価の対象となる。

(10) 教科書、参考書等：

- ・『インターネットを生かした英語教育』 杉本卓・朝尾幸次郎 (大修館書店)
- ・『インターネット時代の英語教育』 Mark Warschauer et al. 古谷千里他訳. ピアソン・エデュケーション

(11) 注意事項：

特になし。

(1) 授業科目名：現代アメリカ社会史特論 a

(2) 副題：アメリカ歴史研究・論文執筆方法入門

(3) 担当教員：山本明代 (非常勤講師・名古屋市立大学)

(4) 開講時限：前期木曜4時限

(5) 教室：文総 623

(6) 目的・ねらい：

授業の目的は以下の2点である。

- a. 合衆国を対象とした複数の学問分野 (ディシプリン) における基本文献や近年の

研究動向の概要を確認する。この作業を通じて、自己の問題意識を明確にし、自分の専門分野と他分野との差異や相互作用を意識化することを目的とする。

b. 社会・文化史の領域における学術論文の執筆方法に関して、テーマ設定や史料（資料）の分析・解釈、議論の組み立て方などの基本事項を確認する。英語のテキストに沿って、講義とディスカッションを繰り返す演習形式で行う。

(7) 履修条件等：

原則として英語文献を使用するため、英語の読解力は不可欠である。また、毎回の授業の際、文献の指定部分を必ず事前に精読しておくことが求められる。

(8) 講義内容：

<授業の概要>

a. アメリカ研究概論

最初の数回のみ、アメリカ研究全般に関する基本文献の確認や近年の社会史研究を中心とする動向のレビュー等を行う。テキストとしては『アメリカ史研究入門』と『アメリカ研究入門 第三版』（詳細は下記「使用するテキスト」欄を参照）を使用するので、準備しておくこと。

b. 講義・演習

最初の数回にアメリカ研究概論の講義・演習を行った後、主に歴史学の学術論文の執筆を想定した講義・演習を行う。各自、研究テーマに近い社会・文化史のテーマを選定し、史資料・文献の調査結果と研究内容を個別報告として行う。

<授業計画>

第1回：概要説明

第2回：アメリカ歴史研究の基本文献と近年の社会史研究（1）

第3回：アメリカ歴史研究の基本文献と近年の社会史研究（2）

第4回：史資料・文献の調査方法

第5回：史資料・文献の調査結果報告（1）

第6回：史資料・文献の調査結果報告（2）

第7回：歴史研究論文の執筆方法（1）

第8回：歴史研究論文の執筆方法（2）

第9回：アメリカ社会・文化史研究の論文分析（1）

第10回：アメリカ社会・文化史研究の論文分析（2）

第11回：アメリカ社会・文化史研究の論文分析（3）

第12回：アメリカ社会・文化史研究の論文分析（4）

第13回：各研究テーマの報告と議論（1）

第14回：各研究テーマの報告と議論（2）

第15回：各研究テーマの報告と議論（3）

定期試験・期末レポートの提出に替える

(9) 成績評価の方法：

授業時に提出する課題（レジюме、書評などを含む）40%

個別報告	30%
期末レポート	30%

(10) 教科書：

- ・有賀夏紀・紀平英作・油井大三郎『アメリカ史研究入門』（山川出版社、2009年）
- ・五十嵐武士・油井大三郎編『アメリカ研究入門 第三版』（東京大学出版会、2003年）
- ・その他の英語文献については開講時に指示する。第一回目の講義には必ず出席すること。

(11) 参考書等：授業中に随時紹介する。

(12) 注意事項：

- ・この授業は演習形式で行うので、各自で事前に共通文献を精読し、毎回のディスカッションに参加することが単位取得の条件となる。
- ・病気等でやむを得ず欠席する場合は、事前にメールで連絡すること。
- ・最初の数回以外は英語文献をテキストとして使用する。そのため、基礎的な英語読解力は不可欠であるが、積極的に参加する意欲のある学生は専門分野にかかわらず歓迎する。

(1) 講義名：第二言語習得演習 a

(2) 副題：なし

(3) 担当教員：村尾玲美

(4) 開講時限：木曜 3 限

(5) 教室：文総 623

(6) 目的・ねらい：

外国語教育を科学的に研究するとはどういうことか。研究にはどのような方法があるのか。第二言語習得研究の分野で修士論文を書くにはどうしたらよいのか。本授業の目的は、科学的実証研究の基礎となる概念を理解し、具体的な研究事例を通してリサーチデザインおよびリサーチメソッドを習得することである。様々な研究目的と研究方法の事例を学ぶことにより、漠然とした修士論文のテーマを設定するのではなく、目的とデータ収集方法と分析方法までを考慮した研究計画を作成できるようにするのがねらいである。

(7) 履修条件等：

特になし

(8) 講義内容：

〔概要〕

教科書として、Mackey & Gass (2005)の *Second Language Research: Methodology and Design* を使用する。第二言語習得研究の分野で論文を書いたことのある人もない人も、もう一度押さえておくべき研究の基本的な概念や論文の書き方について学ぶ。具体的には、実験の手法やデータ収集の方法、クラスルームリサーチの手法、研究の妥当性や信

頼性の話、質的及び量的研究のデザイン、データのコード化、データ分析のための統計処理法などについて、質問や議論を交えながら学んでいく。

〔授業方法および計画〕

授業ではその回の担当者が、まず割り当てられたテキストの要点を説明する。その後、各チャプターの終わりに掲載された Follow-Up Questions について受講生全員で検討し、ディスカッションを行う。ディスカッションは可能な限り英語を使用する。授業時間内に議論が終わらなかった場合はオンラインフォーラムにて質問を受け付け、ディスカッションを継続する。

第 1 回目：講義方針の説明、担当者の割り当て

第 2 回目：Introduction to research

第 3 回目：Issues related to data gathering

第 4 回目：Common data collection measures 1

第 5 回目：Common data collection measures 2

第 6 回目：Research variables, validity, and reliability 1

第 7 回目：Research variables, validity, and reliability 2

第 8 回目：Designing a quantitative study

第 9 回目：Qualitative research

第 10 回目：Classroom research

第 11 回目：Coding

第 12 回目：Analyzing quantitative data 1

第 13 回目：Analyzing quantitative data 2

第 14 回目：Concluding and reporting research

第 15 回目：まとめ

(9) 成績評価の方法：

出席率 30%、担当箇所の発表 40%、ディスカッションおよびフォーラムへの参加 30%。

(10) 教科書、参考書等：

Alison Mackey and Susan M. Gass (2005). *Second Language Research. Methodology and Design*. Lawrence Erlbaum Associates, Inc.

(11) 注意事項：

特になし。

(1) 講義名：社会言語学入門 a

(2) 副題：なし

(3) 担当教員：Liang Chua Morita

(4) 開講時限：前期火曜 2 限

(5) 教室：文総 522

(6) 目的・ねらい：To create awareness and understanding of issues involving language in social

contexts.

(7) 履修条件等：特になし

(8) 講義内容：

Sociolinguistics can be loosely defined as the study of language and society. Sociolinguists and sociolinguistic research play an ever-increasing role in the world. Teachers, educators, curriculum planners, policymakers, as well as researchers, depend on sociolinguistic theories and principles. Sociolinguistics has deepened our understanding and helped solve numerous problems concerning various languages and societies. It has also contributed to enlightened attitudes towards social groups with less power, such as indigenous people and ethnic minorities in North America, and immigrants in Europe.

In Japan, sociolinguistics has practical applications. A case in point is the debate over English education. Popular opinion has it that starting English instruction too early has adverse effects on a child and on his/her subsequent educational attainment. However, enlightened educators such as those at Kato Gakuen in Numazu, Shizuoka, have utilised sociolinguistic research and principles and successfully run a partial immersion programme which has produced excellent results. The study of sociolinguistics is equally useful to teachers and curriculum planners for ethnic minorities such as Brazilians and to dialectologists interested in regional dialects.

The semester is spent on giving students a firm foundation in the basics of sociolinguistics. The topics we will cover include multilingualism, social class, gender, standardisation, education and bilingual education.

< 授業計画 >

第 1 回：Introduction

第 2 回：Language in society/Society in language

第 3 回：Language in society/Society in language

第 4 回：Language choice

第 5 回：Language choice

第 6 回：Language choice

第 7 回：Sociolinguistic patterns

第 8 回：Sociolinguistic patterns

第 9 回：Sociolinguistic patterns

第 10 回：Language and gender

第 11 回：Language and gender

第 12 回：Language and gender

第 13 回：Linguistic problems as societal problems

第 14 回：Linguistic problems as societal problems

第 15 回：Linguistic problems as societal problems

(9) 成績評価の方法：attendance, participation, preparedness for lessons and presentations

(10) 教科書：Romaine, S. 2000. *Language in Society: An Introduction to Sociolinguistics*.

Oxford University Press.

東アジア言語文化講座

- (1) 講義名：韓国・朝鮮語表現論演習 a
- (2) 副題：日本語話者向け韓国語教育における諸問題（文字論・音声学・音韻論）
- (3) 担当教員：飯田秀敏
- (4) 開講時限：水曜 2 限
- (5) 教室：北棟 105
- (6) 目的・ねらい：

日本語話者を対象とする韓国語教育において教師が備えておくべき現代韓国語及び日本語の音声学・音韻論の基礎を整理し、教育現場で生じると考えられる諸問題を効果的に解決するための方法を検討することを目的とする。

外国語教育において、目標言語と学習者の母語の音声学・音韻論・文字論等に関する基本的知識を教師が備えていなければならないことは言うまでもないことである。しかし、これら分野の研究成果をそのまま教育現場に持ち込むことは無用の混乱を引き起こすことにもなりかねない。学習の段階に応じて、どのように問題を把握しどのように解決に迫るべきか教材・教授法の両面から考察したい。

また、韓国語で書かれた教科書を正確に読むことができるようにする。

- (7) 履修条件等：

受講者は中級程度以上の韓国語能力を持っていることが望ましい。

- (8) 講義内容：

〔概要〕

まず、教科書に基づいて、韓国語の文字と音声に関する基礎知識を習得する。次いで、日本語話者を対象とする韓国語の教育現場でよく生じると考えられる文字と音声に関する具体的な問題を取り上げ、問題点の把握→問題点の解決に必要な音声学・音韻論・文字論の基礎知識の整理→問題解決の方策の方向付けで検討する。

〔授業方法および計画〕

教科書に基づいて分担者が基礎知識を整理し、受講者全員で問題点を指摘し、その解放を議論する。授業の進め方のおおよその目安は次の通りである。

第 1 回目：講義方針の説明

第 2 回目～第 4 回目：文字，正書法

第 5 回目～第 9 回目：母音，子音

第 10 回目～第 14 回目：音声過程，超文節特性

第 15 回目：前期の授業のまとめ

- (9) 成績評価の方法：

授業中の発表 50%，レポート 30%，平常点 20%

- (10) 教科書，参考文献等：

I Ik-seop, I Sang-eok, Chae Wang 『Hangukeui Eeneo』 (Singumunhwasa)

- (11) 注意事項：

特になし。

(1) 講義名：東アジア言語論演習 a

(2) 副題：対照アスペクト論研究

(3) 担当教員：柳沢民雄

(4) 開講時限：水曜 3 限

(5) 教室：文総 522

(6) 目的・ねらい：

言語研究は個別の具体的な言語を研究することが主でなければならない。それも音韻だけとかシンタクスだけしか研究しないということであってはならない。ある特定の言語を研究するのであるならば、その言語の音声、音韻から形態論、シンタクス、意味論までの全ての領域にわたって専門の知識を蓄えるべきであろう。またそういった個別言語の研究と同時に、世界の様々な諸言語に見られる音声、音韻、文法カテゴリー、シンタクスなどの一般的な理論研究も必要であろう。人間が使う自然言語には言語の様々なレベルで類似の特徴が多く見られる。そういった人間言語の特徴とはなにかというより広い視野から、常に自分の専門とする個別言語の研究に向かうべきであろう。本講義は後者のより広い視野から言語のある文法的側面を検討しようというものである。

(7) 履修条件等：

特になし。

(8) 講義内容：

〔概要〕

今年度は世界の言語に見られる動詞アスペクト(verbal aspect)について検討する。アスペクトはスラヴ諸語が有名であるが、スラヴ諸語だけでなく世界の多くの言語に普通に見られる文法カテゴリーである。アスペクトとは、動詞が表す動作をどのように言語がとらえるか、すなわち、状態としてか動作としてとらえるのか、限界動作としてか非限界動作としてとらえるのか、限界到達としてか限界非到達としてとらえるのか、といった動作のとらえ方の言語的反映である。従ってアスペクトのカテゴリーはほとんどの言語に何らかの形で反映されると思われる。

スラヴ諸語においてはアスペクトが形態的に高度に発達しているため、アスペクト研究はスラヴ諸語の研究から発達した。そのためロシアにおいては、個別アスペクト研究だけでなく、一般アスペクト研究もかなり豊かな蓄積がある。特にアスペクト研究の専門家である Yu. S. Maslov による一般アスペクト研究は優れたものであるが、日本では一部のスラヴ語専門家や朝鮮語専門家以外に知られていないのではないかと思う(著作がロシア語によるために日本ではほとんど知られていない)。Maslov のアスペクト研究は、日本で著名な Comrie のアスペクト論とはまた違った本格的なものである。

前期は、この Maslov の入門的な ‘An outline of contrastive aspectology’ (pp.1-44) という論文を使って講義をおこなう。この論文は ‘contrastive’ とあるが世界の諸言語に見られるアスペクト範疇を概略し、理論的な枠組みを提示したものである。

後期はアスペクトと他の文法カテゴリーとの関連を視野に入れてアスペクトを考察する。特に談話(discourse)におけるアスペクトの関係を考察する。これは最近とくに研究が進んだ分野であり、談話分析を通してアスペクトを説明するものである。

〔授業方法および計画〕

Maslov の論文（英文）を読み、アスペクトの基本的な概念を理解することを第一の目標にする。このさいにロシア語やカフカース諸語のアスペクトについて説明する。次に、参考文献を使って諸言語に見られるアスペクトを検討する。最後に受講生が専攻する言語のアスペクトについて発表をしてもらう。

(9) 成績評価の方法：

評価は口頭発表とレポートを各 50 パーセントとして評価する。

(10) 教科書：

Maslov, Yu. S. (1985) *An outline of contrastive aspectology*. In *Contrastive Studies in Verbal Aspect in Russian, English, French and German*. Yu. S. Maslov (Ed.) . Heidelberg: Groos. 1985.

(11) 参考文献：

Comrie, B. 1976. *Aspect. An Introduction to the study of verbal aspect and related problems*. Cambridge : Cambridge University Press.

Forsyth, J. 1970. *A Grammar of Aspect. Usage and Meaning in the Russian Verb*. Cambridge : Cambridge University Press.

Maslov, Ju. S. 1984. *Ocherki po aspektologii*. Leningrad.

(12) 注意事項：

特になし。

(1) 講義名：漢民族文化論 a

(2) 副題：中国における 1920～30 年代の文学と知識人

(3) 担当教員：楊曉文

(4) 開講時限：月曜 6 限

(5) 教室：北棟 107

(6) 目的・ねらい：

I. 中国における 1920～30 年代の文学とは何か、当時の知識人が何を考え、激動の時代をどう生き抜いたのかを理解する。

II. 中国文学研究における方法論等を学ぶ。

(7) 履修条件等：

後期（漢民族文化論 b）も引き続き履修することが望ましい。

(8) 講義内容：

〔概要〕

中国における 1920～30 年代の文学を対象として考える場合、種々さまざまな角度による考察が可能であるが、本講義では、受容と展開という視点からのアプローチを試み

る。中国近現代文芸の草創期には、海外の文芸理論の紹介が盛んに行われていた。欧米からの直接的な受容も見受けられたが、アジアでいち早く近代化を成し遂げ、かつ漢字を共有する日本を経由して間接的にそれを吸収するケースが最も多く、そこに日本的な工夫が加味されたからこそ、中国のインテリの興味と関心を惹いたのではなかろうか。厨川白村の文芸理論専門書『苦悶の象徴』の中国語訳が魯迅と豊子ガイ [「ガイ」は立心偏に「豈」] により同時に出版されたのは、このことを雄弁に物語っている。『苦悶の象徴』が民国文壇にどのような影響を与えたか、中国の知識人はそれをいかに自分のものとしたのか、『苦悶の象徴』の受容過程に見出される文化的戦略とは何かなどについて、この講義を通して考えていく。

[授業方法および計画]

I. 『苦悶の象徴』の翻訳に見られる魯迅の意図や、白村理論を魯迅がどのように自らの創作にいかしたのかをめぐって、一部講読もまじえて講義する。

II. 豊子ガイがいかに『苦悶の象徴』を受容し、展開していったかを分析する。

III. 受講者がそれぞれ自らの研究テーマについて発表し、それについて全員で討論する。

(9) 成績評価の方法：

評価は、受講者に担当してもらおう口頭発表を 40%、授業最終時に行う試験を 40%。さらに、出席、授業中の態度、積極的な発言や討論への参加度を 20%程度として加味し、総合的に評価する。

(10) 教科書、参考文献等：

別途指定する。

講読用プリント製本。

(11) 注意事項：

特になし。

(1) 講義名：現代中国語表現論 a

(2) 副題：中国語学の諸問題

(3) 担当教員：丸尾誠

(4) 開講時限：月曜 3 限

(5) 教室：文総 609

(6) 目的・ねらい：

本講義では中国語学に関する中国語で書かれた論文(必要に応じて日本語で書かれたものを扱うこともある)の講読を通して、現代中国語における文法研究の方法論を身につけていく。

(7) 履修条件等：

後期(現代中国語表現論 b)も引き続き履修することが望ましい。

(8) 講義内容：

[概要]

ある言語事象について、その問題の所在を明らかにするとともに、形式・意味・語用・認知などの側面から、総合的に分析を加えていく。講義時には、一般言語学的な視点をも交えて、現代中国語の文法事項について相対的に論じる。一般言語学における言語理論が、往々にしてその特異性ばかりが強調されがちである中国語という言語を分析する際にどこまで有用かという問題についても併せて考えてみたい。履修の前提として言語学・日本語学・英語学などの知識をある程度有することが望ましい。従って、専門外の学生については、必要に応じて当該事項や概念・用語を調べてくることを別途課題として課すことがある。

〔授業方法および計画〕

開講時より数回にわたって中国語の文法概念・文法的特徴などを論じ、その後、論文講読を通して個別の具体的な問題を扱う。日本語に訳していく過程において、適宜用語や概念の解説を行う。原書講読の際には、必ず予習をしていくこと。

(9) 成績評価の方法：

レポートほぼ100%。出席などによる平常点は成績評価時に、補助的に用いることがある。課題は原則として授業で扱った複数のテーマの中から選択できる形式とし、その中に「自分の興味のある文法事象」について自由に論じるものも入れる予定である。その場合、問題の発掘という点が、とりわけ重要となる。

(10) 教科書：

プリントを配布する。学界の動向をも見据えつつ、定期的に刊行される学術雑誌の新しい論文・著書に細心の注意を払い、必要に応じてそれを教材として使用することもある。

(11) 参考文献：

取り扱うテーマに関連する個別の専門書・論文等については授業時に随時紹介するものの、中国語の文法を体系的に理解し、理論を構築していく際の前提となるものとして、以下に挙げるものに常日頃目を通して、文法研究の方法論を把握しておくことが望ましい。

① 朱徳熙《語法講義》商務印書館（邦訳：『文法講義』杉村博文・木村英樹訳，白帝社）

② 朱徳熙《語法答問》商務印書館（邦訳：『文法のはなし－朱徳熙教授の文法問答－』中川正之・木村英樹編訳，光生館） ※この②については邦訳本の方に訳者による詳しい注釈がついており、参考になるところが大きい。

③ 輿水優『中国語の語法の話－中国語文法概論－』光生館

(12) 注意事項：

特になし。

(1) 講義名：現代中国語表現論演習 a

(2) 副題：日中対照研究の可能性

(3) 担当教員：勝川裕子

(4) 開講時限：火曜 4 限

(5) 教室：文総 623

(6) 目的・ねらい：

① 主に中国語文法に関する諸問題を取り上げ、論文講読を通じて、問題の設定やアプローチの仕方等、文法研究の方法論を学ぶ。

② 言語教育への応用を目的とした日中対照研究の可能性を探る。

(7) 履修条件等：

後期（現代中国語表現論演習 b）も引き続き履修することが望ましい。

(8) 講義内容：

〔概要〕

言語の表現形式はその言語を使用する民族集団の事象・現象・心象に対する認識を反映している。本演習では、中国語話者が、空間・時間・数量・否定・可能などに関わる事象をどのように認識し、それがどのように言語化されているかについて、統語的、意味的側面から探っていく。同時に、日本語表現との比較対照を通じて、それぞれの言語内部に見られる種々の現象を有機的に関連付けていきたい。また、中国語教育、日本語教育において、日中対照研究の成果をいかに応用していくかについても併せて考えていく。

〔授業方法および計画〕

初回授業時に受講者の専門分野と関心のあるテーマを調査する。これに基づき、授業前半では中国語の文法概念・文法的特徴に関する基本的なテーマを取り上げ、論文を輪読しながら、全員で討論する。授業後半では毎回、受講者による研究発表（20 分）とそれに対する質疑応答（10 分）を行う。発表担当者には、授業で取り上げたテーマ、もしくは中国語・日本語における任意の言語事象を取り上げ、問題点の整理と独自の分析・考察を発表してもらおう。（※発表の 1 週間前までにレジュメを作成し、教員の添削、修正を経た上で発表に臨んでもらいます。）

(9) 成績評価の方法：

以下の 3 点に基づき、総合的に評価する。

① 授業（ディスカッション等）への参加度（30%）

② 研究発表（30%）

③ 学期末のレポート（40%）

※②③に関して、特に言語専門の受講者は、自身が関心を持つ任意の言語事象を取り上げ、関連付けて分析を深めていくことが望ましい。

(10) 教科書：

プリントを配布する。その他、取り上げるテーマに関連する個別の参考文献等についても、授業時に随時紹介していく。

(11) 参考文献：

中国語文法の体系的把握や文法研究の方法論理解に役立つものとして、以下の文献を通読しておくことが望ましい。

- ① 朱徳熙《語法講義》商務印書館（邦訳：『文法講義』杉村博文・木村英樹訳，白帝社）
- ② 呂叔湘等著・馬慶株編《語法研究入門》商務印書館
- ③ 陸俊明《現代漢語語法研究教程》北京大学出版社
- ④ 徐烈炯・邵敬敏主編《漢語語法研究的新拓展》浙江教育出版社

(12) 注意事項：

中国語論文も題材として扱うため、中国語がある程度理解できることが望ましい。

本演習は受講者の人数、関心等に応じて内容を調整し、演習形式で進めるため、発表・ディスカッションを通じた積極的な参加を期待する。尚、専門分野を問わず、言語に対する強い関心や意欲のある学生の履修は大いに歓迎する。

ヨーロッパ言語文化講座

(1) 講義名：ヨーロッパ都市文化論 a

(2) 副題：ディケンズを通して見るヴィクトリア朝前半の時代精神と社会風潮

(3) 担当教員：松岡光治

(4) 開講時限：木曜 6 限

(5) 教室：文系総合館 623

(6) 目的・ねらい：

この授業は将来高校や大学で教養レベルの英語を教えるための読解力養成を兼ねている。真摯な受講生は、英語の文学作品やその他の文献の精読および多読により、英語読解力が徹底的に鍛えられる。また、英語読解力の向上とは別に、人口に膾炙した問題でも、新たな解釈でできるような独自の視点の発見に努めてもらう。

(7) 履修条件等：

授業は英語文献の輪読および教員の解説が中心となるが、担当以外の箇所も真摯に予習する義務が課される。

(8) 講義内容：

〔概要〕

ヴィクトリア朝の小説家（特にディケンズ、ギャスケル、ギッシング）の作品には、当時の人々が都市に対して抱いていたアンビヴァレンスをイメージ化した言説が充満している。ヴィクトリア朝の都市は、単なる背景を提供する場ではなく、綺羅星のように光かがやくと同時に、悪夢のように恐ろしい空間であった。都市の繁栄の裏面にある

スラム街、貧困、犯罪、売春、アヘン中毒などは、そうした都市空間の脆弱さを表象したものだと言える。授業では、このように近代人の意識が捉えた都市のイメージをできるだけ多くの視点から考察するが、独自のアプローチをするための新しい視点の発見には学際的研究が必要で、授業とは別に様々な文化史および批評理論関連の文献を読んでもらう。

〔授業方法および計画〕

前期は、ヴィクトリア朝前半の作家で 2012 年に生誕 200 年を迎えるチャールズ・ディケンズの作品を演習形式で読み、労働者階級における様々な社会問題を考察する。担当者は予め指定された箇所を精読し、市販できるような達意の日本語に訳すと同時に、ヴィクトリア朝特有の事物や現象については徹底的に調べ、その成果を注釈として発表すること。今回の題材とするのはディケンズが主宰する雑誌『春夏秋冬』の 1866 年クリスマス特集号に掲載された短篇「マグビー・ジャンクション」。ジャンクションとは、日本で言えば、佐賀県の鳥栖駅のような「連絡駅、乗換駅」で、市井の人々の息づかいが感じ取れる場所である。【作品の概要】 Jackson, the solitary “Gentleman from Nowhere,” leaves the train at a great railway junction (based on Rugby); his heart is touched by Phoebe the invalid daughter of the station lampman, and while in a neighbouring town buying a musical instrument for her he encounters a little girl called Polly, who turns out to be the daughter of Beatrice, the girl he had once loved, and her husband, Tresham.

(9) 成績評価の方法：

担当箇所の発表（30％）、質疑応答への参加（30％）、前期のレポート（40％）。

(10) 教科書、参考書等：

最初の授業で指定されたウェブ・サイトから電子テキストをダウンロードし、プリントアウトしたものを使うこと。ディケンズに関する情報については教員のウェブ・サイト “The Dickens Page” と「ディケンズ・フェロウシップ日本支部」のホームページを参照。

(11) 注意事項：

この授業にはメーリング・リスト (urban@lang.nagoya-u.ac.jp) がある。正当な理由があれば授業の欠席を許可するが、担当箇所は事前にメーリング・リストに流すこと。

(1) 講義名：ドラマ研究概論 a / 国際多元文化演習 a

(2) 副題：ドラマ / パフォーマンス研究入門

(3) 担当教員：村主幸一

(4) 開講時限：金曜 3 限

(5) 教室：北棟 107

(6) 目的・ねらい：

(ア) ドラマの特性を捉える能力を訓練する——現代人がフィクションに向かう姿勢は近代小説によって規定されているとする説があります。1970年代末に述べられた「文学の領域でも明治以降の日本では（中略）小説の特権的位置が当たり前になっていて、詩や戯曲は非常に狭いところに押し込められてきた」（『劇的言語』）という言葉が今も当てはまる状況があると感じています。近代小説と比べると、ドラマは確かに台本という形で文字テキストの要素をもちますが、他に役者（とその身体）、演技（またはパフォーマンス）、観客、舞台（物理的条件）などの重要な要素を含みます。これらは小説にはない要素です。その意味においてドラマは総合芸術であり、歴史的に見ても近代のメディアが登場する以前の時代においては、社会の重要なメディア・娯楽・儀式でありました。近代演劇の代表であるチェホフとイプセンの作品は文庫本で読めるものはわずか。この劣勢を跳ね返し、ドラマの特質と面白さを多くの人々に伝えたいと思っています。一つの演劇作品は通常短いものですので、作品を全体的に捉える訓練、細部（ディテール）を全体と関連付ける訓練としても適しています。対象のサイズは小さいけれども、多様な視点から思い巡らすことができるのがドラマなのです。

(イ) 研究方法、論文の書き方を体系的に修得する——みなさんがこれから修士論文や博士論文を執筆する過程で教員からそのときどきにアドバイスを受けることと思いますが、早い時期に「体系的に」理解しておき、執筆の過程で繰り返し振り返ることが大切です。論文執筆の技法はたんに知識としての理解だけではなかなか身につかないと、学生諸君を見ていて感じます。論文執筆の技法は身体的訓練によるしかないとも言えましょうか。自分で実際に取り組む中で自己反省を繰り返すプロセスが大事です（この自己反省がたいは甘いのです）。自己反省できる基礎を作ります。

(ウ) この世のものとは思えない言い回しが頻出する英語論文を読む力をつけるための訓練をする（この読みの力は研究にとっても役立ちます）——英語ができるから英語論文が読んで理解できるかというとなかなか困難のようだと、これも学生諸君を見ています。あなたはご自分のリサーチを日本語文献の範囲に、また母語文献の範囲に限定しようとしていますか。英語文献をリサーチしないでおいて、先行研究はないと豪語している学生も見かけます。とても残念だし、もったいないです。少し英語文献を覗いてみると、すぐに今まで知らなかった理論やアプローチが見つかることが多いからです。

(7) 履修条件等：

とくになし。

(8) 講義内容：

〔概要〕と〔授業方法および計画〕

(ア) について：1) 一学期に3つの演劇作品を取り上げディスカッションします。今

学期はギリシア悲劇、シェイクスピア演劇、近代演劇から各々1つの作品（日本語訳）を選び、参加者にあらかじめ「質問文」を作成していただき、集まった「質問文」を土台にして議論します。2）論文や研究書を輪読形式で議論の要点を捉えながら読み進めます。これは上記1）の作業をしないとき、すなわち回数としては最も多くなります。今学期は演劇論を扱った研究書（英語）をテキストとします。授業での課題は、当番を決め、その日に読み進んだテキストの要約（日本語）を作ってもらい、それを教員が加筆修正し、受講者全員にメール配布し、その日のテキストの内容理解を確認しながら進むという方法を取ります。3）ビデオ鑑賞。上記1）と2）以外のときに。1学期に1～2回。

（イ）について：教員が作成した冊子を用い、それに補足しながら、「研究」「論文」の概念を確立してもらうようにします。また、研究や論文執筆について学生が抱く疑問点についてクラスで考えます。

（ウ）について：そのねらいを、上記（ア）における2）の作業を通して追求します。

(9) 成績評価の方法：

授業への参加（課題・提出物を含む）（30%）と学期末レポート（70%）。

(10) 教科書、参考書等：

- ・ 3つの演劇作品（プリント、あるいは各自購入か図書館の本を利用）
- ・ 演劇論の研究書（プリント）

(11) 注意事項：

（1）前後期の両方を受講することを勧めます。

（2）自家製『論文の手ほどき』を御入用な方には差し上げます。私の授業を受講しない人でも構いません。申し出てください。一応、国際言語文化研究科の学生に限らせていただきます。

(1) 講義名：ヨーロッパ文化分析批評論 a

(2) 副題：文化研究の方法論を学ぶ——検閲をキーワードとして

(3) 担当教員：上原早苗

(4) 開講時限：前期水曜2限

(5) 教室：北棟107

(6) 目的・ねらい：（1）論理的な思考力を身につける、（2）文化研究の基本的枠組みを学ぶ、（3）検閲の実例を具体的に分析してみる。

(7) 履修条件等：授業で配付されたプリント（日本語・英語）を丁寧に予習すること。

(8) 講義内容：「猥褻文書規制法」「GHQ 検閲」「自主規制」—検閲は時空間を越えて様々な形態をとりながらその姿を顕わす制度であり、現代に生きる私たちにとっても身近な問題の一つであるが、なかなか厄介な点を孕んでいる。それは一つには、検閲は表現（の自由）と必ずしも対立関係にないからであり、また時として表現と検閲は循環関係にあるからである。この授業では、一見明解でありながらその実とらえどころのない〈検閲〉について、受講者とともに考えてゆく。

またこの授業では、文化研究の方法論に関する講義・演習を行うことも予定している。受講者には先行研究を批判的に読む、あるいは先行研究に批判を加えたうえで自身の論を構築する、という基本的な姿勢を身につけてもらいたいと思う。

なお、授業の進め方としては、講義を行うだけではなく受講者のレポートの作成・発表、討論を通じて、より大きな成果をあげたいと考えている。この授業の受講者として念頭にあるのは、検閲を始め様々な社会制度のありように興味のある学生、あるいは文化研究の方法論を学びたいと思っている学生だが、知的好奇心のある「勤勉な」学生であれば、誰でも受講することを歓迎する。

(9) テキスト：プリント使用

(10) 成績評価の方法：授業への貢献度＋レポートの内容

(1) 講義名：ヨーロッパ文化芸術論 a

(2) 副題：モデルネ

(3) 担当教員：西川智之

(4) 開講時限：月曜 3 限

(5) 教室：文系総合館 522

(6) 目的・ねらい：

世紀転換期から 20 世紀初頭の文化・芸術の流れをたどることで、文化・芸術と社会の関係を考えるきっかけとしてほしい。

(7) 履修条件等：

後期授業ヨーロッパ文化芸術論 b を続けて履修することが望ましい。

(8) 講義内容：

〔概要〕

19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけては、文学や美術・音楽などの文化・芸術の分野では様々な運動が起き、また科学・学問・思想の分野でもさまざまな発見がなされ、さまざまな考え方が提唱された。美術の分野だけでも、象徴主義、フォーヴィスム、表現主

義、未来派、ダダイズム、シュルレアリスム、キュビズムなど多くの運動を挙げることができる。こうした世紀転換期から 20 世紀初頭（1930 年ころ）までの文化・芸術、社会の動きをドイツ語でモデルネと呼ぶことがある。授業では、当時の文学論、芸術論やモデルネについて書かれた文章を丹念に読むことで、当時のヨーロッパの文化・芸術が秘めていたエネルギーと問題点を理解してもらいたい。

〔授業方法および計画〕

基本的には、与えられたテキストを丹念に読み進めることが授業の中心となる。毎回担当者を決め、その回のテキストについてレポート形式で解説を加えてもらう。現在考えているテキストは以下の通りである。

○シャルル・ボードレー「現代生活の画家」（『ボードレー全集 □』137 頁□182 頁、筑摩書房）

○エミール・ゾラ「実験小説論」（新潮世界文学 21『ゾラ』789 頁□821 頁）

アルノー・ホルツ「芸術—その本質と諸法則」（アルノー・ホルツ、ヨハネス・シュラーフ『ドイツ徹底自然主義作品集』277 頁□330 頁、三修社）

○ヴァルター・ベンヤミン「ボードレーにおける第二帝政期のパリ」第 3 章近代（ベンヤミン『ベンヤミン・コレクション 4 批評の瞬間』262 頁□336 頁、筑摩書房）

○テオドル・W・アドルノ『美の理論』7-30 頁（河出書房新社）

○ユルゲン・ハーバーマス「近代 未完のプロジェクト」（ハーバーマス『近代 未完のプロジェクト』3□45 頁、岩波現代文庫）

(9) 成績評価の方法：

担当箇所の発表（40%）、授業への参加（30%）、前期のレポート（30%）

(10) 教科書、参考書等：

授業時に配布

(11) 注意事項：

特になし。

(1) 講義名：国際社会学演習 a

(2) 副題：グローバリゼーションとナショナリズム 1

(3) 担当教員：鶴巻泉子

(4) 開講時限：前期火曜 5 限

(5) 教室：文系総合館 6 2 3

(6) 目的・ねらい： ナショナリズムに関する講義と基礎的な文献精読を通じて、研究の大きな流れと視座や問題設定の違いを確認すると共に、従来の研究の分析枠組みを批判的に検討する新たな研究動向についても学ぶ。

(7) 履修条件等：前・後期を通じた受講が望ましいが、半期の受講も可能。一般に民族・エスニシティ・移民問題、異文化・多文化の問題に関心を持った方の受講を歓迎する。ただし、講読文献は必ず読んだ上で出席し、かつ議論に積極的に参加することが受講条件となる。

(8) 講義内容：

[概要]

グローバル化と言われる現代、それに逆行するかに見えるナショナリズムに近年再び注目が集まっている。社会学、人類学、政治学、文化研究など様々な分野からの問題提起に目を向けつつ、理論的・実証的観点を通じて、現代においてナショナリズムが持つ意味やその背景を社会的に検討する。前期「国際社会学演習 a」では主に古典の講読を通じた基礎的理論、問題枠組みや方法論の確認、後期「国際社会学演習 b」ではグローバル化を背景とした現代におけるナショナリズムとその表出、意味や背景の分析に重点が置かれる。

[授業方法及び計画]

この授業では数回の講義の後に、ナショナリズム研究の古典と目される文献の講読を行う。A. スミス、E. バリバール、E. ウォーラスティン、E. ゲルナー、E. ケドゥーリー、E. ホップズボーム、B. アンダーソンなどを主に考えているが、参加者の関心に応じて文献を選択し担当を決定する。

基礎的な概念や古典的研究の確認もさることながら、特に以下の点に注目することにしたい：身分、階級、宗教、言語、ジェンダーなどが違う人々を「国民」にまとめあげていく「国民化」、あるいはネイションへの包摂プロセスはどのようなものだったのだろうか。しばしばモデルとして言及されるヨーロッパにおけるネイション創出と他の地域には、どのような背景・プロセスの違いがあったのだろうか。ネイションに対置されるものとしての「他者」の表象はどのようなものだろうか。

なお初回講義はガイダンスにあて、レジュメの作り方や文献・資料引用、ディスカッション・ポイントの提示などを説明する。

※この授業において「ナショナリズム」は日本語の「民族主義」という言葉が一般的に持つニュアンスとは全く異なった意味で用いられるので注意。以下の吉野耕作による「ナショナリズム」の定義を参考にされたい：「我々は他者とは異なる独自の歴史的、文化的特徴を持つ独自の共同体<ネイション>であるという集合的な信仰、さらにはそうした独自感と信仰を自治的な国家の枠組みで実現、推進する意思、感情、活動の総体」。

(9) 教科書、参考書等：文献リストを配布。

(10) 成績評価の方法：講読文献のレジュメ発表（50%）＋議論への積極的参加（50%）

(11) 注意事項：欠席の際には前もってメール（tsurumaki@nagoya-u.jp）・電話（052-789-4798）などでの連絡をお願いします。

(1) 講義名：近現代文化研究特論 a

(2) 副題：Play, Laughter and the Meaning of Life (a)

(3) 担当教員：Mark Weeks

(4) 開講時限：火曜3限

(5) 教室：北棟107

(6) 目的・ねらい

The primary aim is to develop the ability to think vigorously, rigorously and with intellectual flexibility across various academic fields through an extensive exploration of related themes. Increasing cultural knowledge and fostering skills in the areas of academic discussion, reading and writing are further aims.

(7) 履修条件等：無

(8) 講義内容：

Play is a foundational element of culture and essential to intellectual, scientific and artistic endeavor. Moreover, our attitudes to play and humor are deeply connected with our sense of purpose in life, along with our identities as individuals and societies. This course explores these relations and the important changes that have occurred in modern history leading into so-called “post-modern play” and the present period of globalization. While discussing sociology, psychology, literature, philosophy and film, especially from European and American cultures, classes will also draw on students’ own cultural knowledge and experiences.

The course will follow this sequence:

1. Play as the basis of culture: Johan Huizinga
2. The cultural and psychological functions of happiness
3. Critiquing contemporary research into happiness
4. European theories of the comic and laughter
5. Carnival play, creativity and society: Rabelais to Bakhtin
6. Play, wonder and scientific innovation: Renaissance to Einstein
7. Comedy versus time/death: Quixote, Shakespeare, Sterne
8. Philosophical defenses of Idleness: Socrates to Bertrand Russell
9. American idleness versus the work ethic: Mark Twain to *The Big Lebowski*
10. Play and laughter in the philosophy of Friedrich Nietzsche
11. Art meets play in Modernism: Oscar Wilde to Charlie Chaplin

- (9) 成績評価の方法：2 short papers (2 x 20%), a final research paper (40%), class participation (20%)
- (10) 教科書：All materials will be provided by the instructor.
- (11) 参考書等：A dictionary (electronic or book form) will be indispensable.
- (12) 注意事項：無

ジェンダー論講座

- (1) 講義名：ジェンダーとセクシュアリティ a
- (2) 副題：映像と精神分析
- (3) 担当教員：松下千雅子
- (4) 開講時限：火曜 2 時限
- (5) 教室：
- (6) 目的・ねらい：

精神分析を応用した映像の分析手法を獲得することがこの授業のねらいである。授業では映像による具体例を示しつつ、難解とされるラカン理論の概略を提示し、その有効性を明らかにする。

- (7) 履修条件等：
なし

- (8) 講義内容：

精神分析は映像化されたセクシュアリティを読むための真に有効なツールとなりえるだろうか。あるいはまた、映像を読み解くことを通してセクシュアリティに関する精神分析の記述に修正を加えていくことは可能だろうか。スラヴォイ・ジジエクは『斜めから読む』においてラカンのコンセプトを利用してヒッチコックの映像を分析し、ラカンとヒッチコックの間の接点を探っている。ジョアン・コプチェクは『わたしの欲望を読みなさい』においてフーコーの言説理論に対する精神分析の優位性を主張している。どちらも重要な書物であるが、授業では、特にセクシュアリティに関する議論を深く掘り下げる。映像を適宜示しつつ、ラカン理論への正しい理解と応用力を高めていく。

<授業計画 >

- 第1回：イントロダクション
- 第2回：精神分析と探偵小説
- 第3回：精神分析とヒッチコック
- 第4回：対象 a について
- 第5回：現実界と象徴界
- 第6回：無意識とは何か？
- 第7回：享楽について

- 第8回：宮廷愛
- 第9回：女とは誰か？
- 第10回：鏡とスクリーン
- 第11回：フェティシズム
- 第12回：宿命の女
- 第13回：まとめ
- 第14回：発表
- 第15回：発表

(9) 成績評価の方法：授業への貢献点 50%、期末レポート 50%。

(10) 教科書：スラヴォイ・ジジェク『斜めから読む—大衆文化を通してラカン理論へ』（青土社）、ジョアン・コプチェク『わたしの欲望を読みなさい—ラカン理論によるフーコー批判』（青土社）、ジャック・ラカン『エクリ I』（弘文堂）

(11) 参考書：

授業で適宜紹介する。

(12) 注意事項：

昼休みを利用して映画を見ることがあるので、授業終了後も教室に残っていることが必要。

(1) 講義名：ジェンダーと文学A

(2) 副題：女性学・男性学・ジェンダー・フェミニズム文学批評入門

(3) 担当教員：星野幸代

(4) 開講時限：月曜3限

(5) 教室：北棟107

(6) 目的・ねらい：

①女性学・男性学・ジェンダーの用語・事項について基礎的事項を学ぶ。②特に日本の現状に基づき、女性学・男性学・ジェンダー関連の事象について映像資料をもとに、討論を通して理解を深める。③フェミニズム／ジェンダー文学批評の基礎をふまえ、最近の論著の方法を学ぶ。

(7) 履修条件等：

前期授業Aと後期授業Bを続けて履修することが望ましい。

(8) 講義内容：

〔授業方法および計画〕

初回4月18日 ガイダンス：女性学、男性学、ジェンダー学の歴史と主な用語について概説し、前期の授業全体についてアナウンスする。

2、女性学・男性学・ジェンダー学入門編・講義＋短い討論

注意★極く初歩的な内容を講義形式で行います。ですから、後期課程の学生など、基礎的なことが分かっている人は出席しないでよいです！

3～8は短い関連講義のあと映像資料を鑑賞し、それについて討論する。

- 3、“女性専用”について考える
- 4、セクシュアル・ハラスメント
- 5、日本の家族とジェンダー
- 6、リプロダクティブ・ヘルス（1）「産む選択」を中心に
- 7、リプロダクティブ・ヘルス（2）「産まない選択」を中心に
- 8、ジェンダー・フェミニズム文学批評入門編・講義＋短い討論
- 9～15（10）に挙げるテキスト（順不同）から、受講者と相談しつつ一～二章ずつを選び、担当者を決めます。

担当者の役割：一、レジュメを作成して配布 二、40分前後で発表する。

レジュメは、論旨概要を節毎にまとめ⇒論旨の上で重要な作家、作品、理論のうち補足が必要と判断したものは簡単な解説を⇒自分の疑問点・意見、皆で議論したい点を提示。

その後、参加者全員で討論します。

(9) 成績評価の方法：

第3回～7回については、興味関心のある映像資料1点について、討論の内容を加味しつつ批評レポートを提出。これを40%。9～15回において担当者になった人は発表で40%。（人数の関係から担当者になれなかった人は、9～15回の内容に関するレポートをもう1本提出）授業中の積極的な発言や討論への参加度を20%程度として、総合的に評価する。

(10) 教科書（順不同）

- 廉岡 糸子，近藤 眞理子『少女たちの冒険—ヒロインをジェンダーで読む』 2006
- 生駒 夏美『欲望する文学—踊る狂女で読み解く日英ジェンダー批評』 2007
- 水間 碧『隠喩としての少年愛—女性の少年愛嗜好という現象』 2005
- 藤本由香里『私の居場所はどこにあるの？—少女マンガが映す心のかたち』 2008（1998の文庫版）

千田 洋幸『テキストと教育—「読むこと」の変革のために』 2009

『ユリイカ 特集=母と娘の物語 母／娘という呪い』2008年12月号

熊田 一雄『男らしさという病?—ポップ・カルチャーの新・男性学』 2006

☆これ以外でも、授業のテーマに合い、是非扱いたいテキストがあれば、それを自分の分担として発表しても構いません。

(11)参考書等：必要に応じて提示する。

(12) 注意事項：特になし。

(1) 講義名：ジェンダーと経済 a

(2) 副題：なし

(3) 担当教員：新井美佐子

(4) 開講時限：水曜6限（開講後、受講者と相談の上、変更の可能性あり）

(5) 教室：情言北棟 107

(6)目的・ねらい：

- ・経済学あるいは経済事象にジェンダー視点から接近し、そこにおける問題点を理解する。
- ・文献の講読、レジュメ作成、ディスカッションへの参加を通じ、論文を書く、意見を交わすといった研究活動の基礎を修得する。

(7) 履修条件等：

経済学の知識を備えた上での受講が望ましいことは無論だが、必須ではない。「経済」とは、われわれの「日常生活」とも言い換え得る身近な活動であり、そこにおけるジェンダー問題とは誰も無関係ではないはずである。受講者の希望（言語、難易度など）を可能な限り考慮して講読文献を決める予定なので、専門分野を問わず、また単位が不要であっても、関心や意欲のある学生の真摯な受講は大いに歓迎する。

(8) 講義内容：

経済学では、いわゆる主流派、非主流派の双方において、長らくジェンダー視点が欠落していた。このことを見直し、経済学やジェンダー研究の学問的発展につなげようとする動きが活発化したのは、1990年代に入ってからに過ぎない。本演習では、女性研究者を中心に、学派の相違を越えて取り組まれているこうした試み - 「フェミニスト経済学」 - について、国内外の文献から学ぶ。

具体的な内容は以下の通り。

初講はオリエンテーションを行う。

続く第2講以降、数講かけて、久場嬉子（2002）「ジェンダーと『経済学批判』 - フェミニスト経済学の展開と革新 -」（久場編『経済学とジェンダー』明石書店叢書、所収。希望者には初回にオリジナルを貸すので、事前の入手は不要）をテキストに、経済学におけるジェンダー研究の概要を把握する。

その後、主に理論研究を扱った文献を、次のような手順で講読する。

1. 報告者による講読文献のまとめ（要レジュメ）
2. 用語・内容等に関する質疑応答や解説
3. 報告者あるいは受講者が提示したディスカッション・ポイントについて議論

レジュメには、単に講読文献の抜書きを羅列するのではなく、講読文献の構成や内容が明瞭に捉えられるよう工夫を凝らして欲しい。またディスカッション・ポイントの提示に際しては、講読文献の内容を補足あるいは発展させるようなデータや文献、資料を添付するなどしても構わない（むしろ望ましい）。これらの作業は、テーマに関わらず、「論文を書く」□既存研究の不足点あるいは批判すべき点を見出し、問題として設定し、適切な方法と過不足なく明確な論述によって解を示す□ための訓練の一つとなろう。

具体的な講読文献については、受講者の希望等を考慮して決定する。なお、後期開講の「同演習 b」では、（本演習での理論研究に関する文献に対し、）実証分析に関する文献を取り上げる予定である。

さらに、教員あるいは受講者が参加した関連学会・研究会に関する報告なども適宜行い、最新の研究成果の紹介に努める。

「経済」という語がカバーする範囲はいうまでもなく非常に広く、特にジェンダーとの関わりが深いと考えられる分野に限っても、労働、子育て・介護をはじめとする社会的再生産、社会保障、あるいはグローバルな経済システム等、多様である。本演習でこれら全てについて検討することは無論不可能であるが、上記のような様々な経済領域が密接に関わりあっているということを常に念頭に置き、広い視野でジェンダーを理解するよう心掛けて頂きたい。なお、本演習を通じて、ジェンダー研究が、女性（とりわけ、いわゆる「働く女性」）のみの利益を追求・主張するものでは決してないことが理解されると思う。

(9) 成績評価の方法：

毎回のディスカッションへの参加度（50%）、ならびに報告担当時のレジュメ/ディスカッション・ポイントの内容（50%）。

(10) 教科書：上記「演習内容」を参照のこと。

(11) 参考書等：演習中に適宜紹介する。

(12) 注意事項：

・後期開講の「ジェンダーと経済 b」を継続受講することで、上記「(4)目的・ねらい」がより達成されると思われる。

・欠席する際には、メール等にて極力事前連絡のこと。